

## 考える糧 分化・個別化

5月29日の主題の事前資料です。

私の問いかけや疑問、共感などご自由に書き込んでください。



池田賢市 不登校だって大丈夫 暮らしの手帖 88 2017

学びは義務ではなく権利である

学生によくする質問なのですが、皆さん、「義務教育」って、どんなもので、なんのためにあると思いますか？  
ちょっと考えてみてください。

「日本人が6歳から15歳までに受けねばならない教育」「社会に出て困らないように、最低限、必要な知識をまなぶこと」。そのように考えた方は、少なくないのではないのでしょうか。

「義務教育」とは、正しくは、子どもの学ぶ権利の保障を親に課し、その条件整備を行政に課すものです。そもそも、子どもが親によって労働力として使われることのないように、子どもを保護する観点から生まれました。ここでたいせつなのは、「義務教育」が学ぶ側の義務や学ぶ内容を指す言葉ではないということ。そして、学びは子どもの「権利」である、ということです。

これを踏まえると、不登校がまるで「問題」のように扱われるのは、不思議なことと言わねばなりません。学ぶことは権利なので、その権利はいつどんなふうに行使してもいいのです。

「体調がわるいので、しばらく休みます」とするもの自由だし、「そろそろ勉強しなくなったので」あるいは「学びたいことが見つかったので」勉強を再開するのもいい。そもそも権利を行使する・しないに理由などいらないとも言えます。「学校」はそういった子どもの学びの権利を保障するひとつの場でしかありません。

「問題」にされるべきなのは、子どもが学ぶ権利を行使できるように、そのための環境をしっかりと用意できているかどうか。決して、国や地方公共団体が用意した学校に、子どもが登校できているか否かではありません。日本の教育現場では、子どもを一律に勉強させ、一律に競わせます。それが当たり前のこととされています。とかく個性個性と言われる昨今の世の中で、学びのあり方においては、個性はなかなか認められません。これは残念なことです。

子どもの個性を生かした学び。それはどうしたら実現できるでしょうか。

日本の教育政策、子どもを特徴ごとに分けようとする傾向があります。障がいのある子、勉強のできる子、日本語が不得意な子、不登校の子……。そして、それぞれ個別に教育しようとしています。

「ひとりひとりの子どもに合わせた教育」と聞くと、きめ細やかなよいもののように聞こえるかもしれませんが、果たしてそうでしょうか。ここで気をつけたいのは、個性と個別が混同されている点です。

「個別化」は、聞こえのよい「排除」です。さまざまな子どもに対応した、個別の学校・学級のある教育制度は一見、多様性があるようでも、そのひとつひとつを見れば、同じラベルをつけられた子どもたちが仕分けされているに過ぎず、そこに多様性はありません。「子どもの個性を認める」「いろいろな子どもがいていい」と言いながら、皆でワアワアと一緒に学ぶという環境は、決して作られていないのです。これは「インクルーシブ教育」という国際的な流れとは、逆の発想です。

考えるべきは、既成の学校教育に合わない子どものために別の学校や学級を用意することではなく、「どんな子どもも安心して学べる学校はどうしたら作れるのか」ということです。教育政策をめぐる議論では、この問いがいつも、すっぱりと抜け落ちていきます。

### 質問1

一人ひとりの子どもに合った学習を提供するという「個別化」は「インクルーシブ教育」とは相反するものでしょうか。

しないと思います。学習課題に取り組むための、学習者が手に取りやすい(これなら勉強できそう)、それにあった教材を複数用意することか可能だと考えます。

相反するものではないと思います。持っている課題は違えども、同じ時を過ごす中でそれぞれの成長が望めるのではないのでしょうか。

「個別化」を辞書で引いてみると、「いくつかあるものをそれぞれ一つ一つ、はっきり分けること。」と出てきました。この意味での「個別化」は「インクルーシブ教育」とは相反すると思いました。ただ、同じく「個別」を辞書で引いてみると、「いくつかあるもののそれぞれ一つ一つ。またそれぞれについて、別々にある動作を行なうこと。」と出てきました。緩やかに包括されている中で、生徒1人1人が確固たる「個」として存在し、自分に合う方法を選択して学べる「個別・化」なら「インクルーシブ教育」と相反するものではなくないと思います。

相反するものではないと思います。

一人ひとりの子どもが、自分の興味を深めていく学習を集中して行うことができる。というのが「個別化」のイメージです。また、『一人ひとりの興味を深めていく学習』を尊重しあえるのが、インクルーシブ教育の視点だと考えます。インクルーシブ教育の視点で「個別化」を考えていくことが必要だと考えています。

---

文部科学省(2021年3月)学習指導要領の趣旨の実現に向けた 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する 参考資料

「個別最適な学び」について「**指導の個別化**」と「**学習の個性化**」に整理されており、児童生徒が自己調整しながら学習を進めていくことができるよう指導することの重要性が指摘されています。

全ての子供に基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するためには、**教師が支援の必要な子供により重点的な指導を行うことなどで効果的な指導を実現することや、子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの「指導の個別化」**が必要である。

「指導の個別化」は一定の目標を全ての児童生徒が達成することを目指し、個々の児童生徒に応じて異なる方法等で学習を進めることであり、その中で児童生徒自身が自らの特徴やどのように学習を進めることが効果的であるかを学んでいくことなども含みます。ICTを活用することで得られる新たなデータも活用し、きめ細かく学習の状況を把握・分析したり、個々の児童生徒に合った多様な方法で学んだりしていくことで、確実な資質・能力の育成につながっていくことが期待されます。また、学習履歴(スタディ・ログ)、生活・健康面の記録(ライフログ)等、児童生徒に関する様々なデータを可視化し、学習方法等を提案するツールなど、新たな情報手段の活用も考えられますが、そのような新たな情報手段の活用も含め、児童生徒が自らの状態を様々なデータも活用しながら把握し、自らに合った学習の進め方を考えることができるよう、教師による指導を工夫していくことが重要です。

質問2

指導方法・教材や学習時間のほかに個別化が可能なものは何でしょうか。柔軟な提供・設定は具体的に何をすることででしょうか。

興味関心に応じて集団をつくって、あるいは一人でも、という設定もあ理だと思います。

細かいことかもしれませんが、「姿勢」も個別化が可能だと思います。(床に座って学ぶのか、椅子に座って学ぶのか、立って学ぶのか、立て膝で学ぶのか)柔軟な提供をするには、生徒の様子をよく観察する、行き詰まっている様子を見かけたら別の方法を提案する、自分に合った方法を選択する際に恐怖を感じない雰囲気にする、などでしょうか。(抽象的になってしまいました)

基礎的・基本的な知識・技能等や、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、**幼児期からの様々な場を通じての体験活動から得た子供の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、探究において課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行う等、教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」も必要である。**

「学習の個性化」は個々の児童生徒の興味・関心等に応じた異なる目標に向けて、学習を深め、広げることを意味し、その中で児童生徒自身が自らどのような方向性で学習を進めていったら良いかを考えていくことなども含みます。例えば、情報の探索、データの処理や視覚化、レポートの作成や情報発信といった活動にICT を効果的に使うことで、学びの質が高まり、深い学びにつながっていくことが期待されます。また、児童生徒がこれまでの経験を振り返ったり、これからのキャリアを見通したりしながら、自ら適切に学習課題を設定し、取り組んでいけるよう、教師による指導を工夫していくことが重要です。

登校のタイミングや、学習で自身が用いるツールの選択がそうだと思います。そのためには、オンラインでの学習環境の充実や、教師のマインドセットの変革が必要だと考えています。

### 質問3

「学習の個性化」はとりわけあたらしい考え方ででしょうか。「指導の個別化」とは異なる表現を使う理由は何でしょうか。

学びはそもそもパーソナルな経験(集団が関わったものも結局は個人の経験として個人に収束する)なので、学習が個別化という表現はならないのではと考えます。指導の個別化は、大人数の日本の教育実態だからこそ、大人数の状態でも個別の指導をするべきだ、というニュアンスで言われているのかなと思います。

あくまで文章を読んで受けた印象ですが、「指導の個別化＝支援が必要な生徒のフォロー」「学習の個性化＝すべての生徒の特性に合わせた学びのスタイル」という感じがします。

特に新しい考え方であるとは思えませんが、『変わらない教員への配慮』があるような印象を受けました。

教員経験で感じるのは、指導の個別化は、生徒から信頼されている先生方は自然と、無意識に、あるいは経験から身に付けているものなのかなと感じます。前任校では「合理的配慮」という形ですが研修がありました。昔からありましたが、可視化されてきたという印象を受けています。

### **Carol Ann Tomlinson (2014) *The Differentiated Classroom***

To use an analogy, if the goal is for students to travel from Miami to Boston, the teacher keeps an eye on each student's daily journey toward the final destination. He has no intention of having some students only make it to Atlanta or having others end up in Los Angeles. On the other hand, there are many highways and side roads that lead to Boston, as well as varied modes of transportation and timetables available. In no way does the teacher feel compelled to have every student travel exactly the same distance each day or always use the same mode of transportation.

Further, the teacher understands that a pivotal classroom goal is to help students take charge of their own learning—to help them seek awareness of learning goals, become increasingly conscious of their status relative to those goals, and make plans that support their movement steadily toward (and perhaps beyond) the goals. Encouraging students to analyse their own work relative to clearly articulated goals and criteria for success helps them consistently grow in independence, agency, and self-efficacy as learners.

In a differentiated classroom, the teacher is the leader; like all effective leaders, she attends closely to her followers and involves them thoroughly in the journey. Together, teacher and students plan, set goals, monitor progress, analyse successes and failures, and seek to multiply successes and learn from failures. Some decisions apply to the class as a whole. Others are specific to an individual.

A differentiated classroom is, of necessity, student-centred. Students are the workers. The teacher coordinates time, space, materials, and activities. Her effectiveness increases as students learn to help themselves, their teacher, and one another achieve group and individual goals.

#### 質問4

Tomlinson教授の解説で文科省の説明にはないもの、異なるものは何でしょうか。

「Leader」と「指導」者とのニュアンスの違いをなぜか感じます。日本の「指導」者というと、何となく、一方的に教え込むとか、判断するとか、命令するとかそんな印象を受けるのはこれまでの指導者像の影響か？

指導といふとなにかその立場の人が完全な存在で、指導される存在は、欠落しているもの、不完全であるもの、といったニュアンスを受けてしまいます。

Tomlinson教授の解説では、「教師と生徒は一緒に、計画を立て、目標を設定し、進捗状況を監視し、成功と失敗を分析し...」とあるので教師は生徒に伴走している感じがします。文科省の説明では教師から生徒にたくさんのものを「提供」している印象です。

“A differentiated classroom is, of necessity, student-centred. Students are the workers. The teacher coordinates time, space, materials, and activities.”この部分が文部科学省の説明とは圧

倒的に異なる点だと感じました。あくまでも文部科学省は、教える人としての『教師』を捨てきれていない印象を感じます。